

やつと今日も一日が終わった。

机上に出していた鞆の中に教科書類を詰め込みながら、思わずため息がもれました。

学校生活に特別不満はありませんが、無駄に気疲れしたりなんだりでなにと体力を使うため、一日が終わる頃には毎日へとへとです。僕の場合は帰宅部なので、特に用事がなければ帰るだけです。部活をしている子はここからさらにやることがあるのだから、本当にすごいと思います。素直に尊敬です。

予習復習をしておきたい教科をピックアップしつつ、のろのろと手を動かしている、教室の扉の方から僕の苗字を呼ぶ声が聞こえてきました。同級生先輩後輩問わず、クラス外での繋がりがあまりなく、声をかけられることなんて滅多にないので、驚きつつもそちらの方へ体を向けると、唯一親しくしてもらっている先輩の姿がありました。慌てて先輩の元へ向かいます。

「こんにちは先輩、お久しぶりです」

「久しぶり、突然教室に押しかけてごめんね」

もう任期は終わってしまいましたが、図書委員会で一緒になってお世話になった先輩です。誰に対しても優しく、いつもにこにこしていて綺麗で———により、本の趣味が合うので、よくお話をした間柄だったりします。一緒に図書受付の仕事をして、好きな作家さんをオススメし合ったのは僕の中で大切な思い出です。

でも、先輩の姿を見るのはかなり久しぶりでした。ご本人に直接聞いたわけではありませんが、体調を崩して長期休みをとっていると噂になっていたので。目の前にいる先輩は、すっかり元気になったように見えますが、心配になつて恐る恐る尋ねてみました。

「うん、もう大丈夫だよ。キミは相変わらず優しいね、ありがとう」

「……そんなこと、ないです」

どれくらいの期間お休みしていたのかわかりませんが、授業などは大丈夫なのでしょうか。純粹に疑問を抱きつつも、図々しく聞けるような間柄ではないので口を噤みます。

ところで、鞆を持っているから帰りがけにそのまま立ち寄ってくれたのだと思います。が、わざわざ僕の教室まで来るなんて、一体どうしたんでしょう。質問して返ってきた答えに、僕は驚きました。

「そうそう、前に話した本のこと覚えてるかな？ 図書室に入ってたって聞いて、

伝えたかったんだ」

「えっ！ そのためにわざわざいらしてくださいだったんですか？」

「前に話したときにすごく気にしてたなあと思ったんだけど……さすがに迷惑だったかな？」

「そんなことはありません、ありがとうございます」

「そうだ、これから図書室寄ろうと思つてただけで一緒に行く？」

「あ、はい、是非！ 僕、ちょっと鞆持ってますね」

片付け途中だった鞆のファスナーを閉じて肩にかけると、先輩の元へ小走りで駆け寄りました。「そんなに慌てなくてもいいのに」とくすくす笑う先輩はやっぱ綺麗で、なんでもか目を逸らしてしまいます。

恋愛感情はありませんが、いつ見ても綺麗で魅力的な人だと思います。先輩なのに威圧感もなく、一緒にいて落ち着くから不思議です。

僕の教室から図書室へ向かう途中、上級生のクラスが続く廊下に差し掛かりました。縦の繋がりが全くといっていいほどにない僕は、自分の学年以外の領域を歩くときになんか緊張してしまいます。普段図書室に行くときも、わざわざ遠回りしてこのルートを通らないようにするほどです。そのため、ドキドキしながら先輩の後ろに隠れるようにして歩いていましたが、突然立ち止まった先輩の背中に鼻先をぶつけてしまいます。

「わっ、すみません」

「ごめんごめん、ちよっとお手洗い寄ってもいい？」

「もちろんです」

僕はここで待ってますね、と口にしかけてやめました。廊下にたむろっている上級生達からの突き刺さるような視線を、痛いほどに感じたからです。